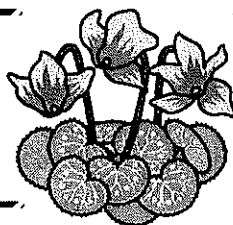


礼拝

昭和5年12月11日
6号



成道会にちなんで

謙虚にして真理探究 (帰依仏)
誠実にして精進努力 (帰依法)
親切にして相互協同 (帰依僧)

お釈迦さまはシャカ族の王位を捨て出家され、六年もの間厳しい修行をなさいました。お釈迦さまが出家をするに至った課題は、人間が老い、痛み、死ななければならぬという、生きる上での根本的な苦しみをどう解決するかということでした。その人生苦の真理を探究し、苦の起こる原因の解決のため瞑想をされました。その間には多くの悪魔が立ちまわりましたが、風を巻き起こし、大雨を降らせ、熱い炭火を投げつけ、灼熱の灰を降らすなど、様々な手を使って攻撃を繰り返しましたが、お釈迦さまはこれらすべてを退けました。この悪魔とは、誰もが持

っている欲望、怠惰、恐怖、疑惑、偽善など、六年間の修行中に湧いてきた誘惑と揺れる心の葛藤を表したものとされています。そして今からおよそ二六〇〇年前の十二月八日、夜通し坐禅を続けていたお釈迦さまは、夜明けの空に輝く明星を見上げ、お悟りをお開きになられました。これを成道(ごよごよ)といい、この仏教誕生を記念して毎年十二月八日に成道会(ごよごよ)が行われるようになりました。

お釈迦さまがお悟りを開かれたとき「奇なるかな、奇なるかな、一切衆生はことごとく、みな如来の智慧徳相(ちえとくそう)を具有す。ただ妄想執着あるがゆえに証得せず。」

(何と素晴らしいことか、何と素晴らしいことか、すべての生きとし生けるものは、みな、悟りを得る可能性を持った存在で、智慧と慈悲の心を備え、そのまま光り輝く素晴らしい存在ではないか。ただ、自分の欲望や執着が邪魔をしてしまっているので、それ(仏性)に気づかないだけなのだ。)

と言われたそうです。つまりお釈迦さまは、この欲望や執着という悪魔を退け、仏性に目覚められたお方なのです。

では、私たちも、もともと持っている仏性に気づくことはできるのでしようか。欲望や執着の心が仏性の気づきを妨げるものなので、簡単に考えればそれら

をなくせばよいということになります。しかし欲望や執着は、私たちが生きている限りなくなるものではありません。考えようによつては、欲望や執着があるから、それを目標として生きているといえないこともありません。そう考えると、無理にそれらをなくそうとして間違った努力をすると、逆に自分を苦しめ、最後には欲に支配されて本来の目標が達成されなくなるのです。つまり、欲望も執着もなくせないこと気づき、間違った方法で「なくす」のではなく、正しい方法で「コントロールする」ことが大切なのです。私たちの心には二つの側面があります。一つは、嫌いだと思っていることや、自分にとって都合の悪いことは排除しようとする心のはたらきから生まれる、自分中心の我欲執着(がよごご)の心です。もう一つは、相手の立場に立ち、他を理解し受け入れることで自他ともに幸せになろうとする思いやりの心のはたらきから生まれる、とらわれのない心です。人生苦というのは、そもそも自分の心が作り出したものであるからこそ、誰一人として避けては通れない道なのです。そのことを受け止め、常に謙虚さ・誠実さ・親切さによつて自分の心をコントロールしていくことが悟りへとつながる道だということなのです。成道会にちなんで、あらためて本校の校訓を中心とした生活を送ってみてはいかがでしようか。